

仏入涅槃の二月十五日

仏陀は四大不調の中にも、終焉の地クシナガラサラッ
ウ樹の間に安座された。阿難はお別れのきたことを悲歎
し、涙がとめどなかった。仏陀は静かに
「阿難よ、内外の区別なしに法を説いた。汝等は法を灯明
とし、自分自身をよりどころとせよ」

と教えたまい、さらに

「私は戒律を定め、法を教えた。この法と戒律は、私の死
後の汝達の師である、私の入滅によって正法が絶たれるこ
とはない。

あらゆる一切のものは無常である、おこたらず絶えず努
めなければならぬ」

これが最後のおことばであった。説くべきことはすべて
説き終り、為すべきことはすでに為し終り、ここに釈尊は
深く禪定に入って入寂された。

「世尊は正に涅槃に入りたもうた！」

と、阿難は大衆に告げた。

「世の眼は滅したり

あまりにも早く滅したり

今日より誰をたよらん！」

と大衆は泣き叫んだ。

「憂いてはならぬ、悲しんではならぬ、

仏はすでに諸行無常を説きたまえり」

と、大衆を阿那律は慰めはじめた。

この時天上はるかに歌う声が聞こえてきた。

「世尊は、衆生を救わんために

人の世に下られしなり

如来は慈母にまします

大悲の乳を与えて人々を育てたまえり

この無常大悲の御母は

遠く今去りたまえり

されど、されど

大法のひかりはもとの如く照りつつ

我等を照らす

三有の苦はために除かれん」

誓願の親心

近角常観

誓願のやるせなき御親心は如何なる不思議にてまします
ぞ。とてもたすかるべからざる我身をばとくにたすけたま
わんとて、日夜待ちかねたまう親心なり。必ず落すべきこ
の身をば、御身をかけて落さじと呼びかけたまう御声な
り。この待ちかねたまう御やるせなきお心をいただけよ。
一往二往のことならず、五劫思惟のおこころをいたしましめ
たてまつりしも、ひとえに我等が罪業深重のためなりけり。

われかつて親父の臨終に、訣別告白して曰く、如来様の
おたすけ下さるのがありがとうございます。父こたえて
曰く、たすかれぬものを、と。

この一言胸に徹して、我おぼえず枕頭にあやまりはてて、
嗚呼、たすかれぬものを、嗚呼、たすかれぬものを、
嗚呼、たすかれぬものをたすけたまう御親心にてまします
か。御不思議、御不思議、御親心を知り顔をして申せしこ
とははずかしさよ。たすけて下さるのが有難いでは、親心
が分つたのではない。たすかれぬ罪業深重のこの身、物

知り顔なる橋慢至極のわが身をば、必ずたすけ救わんと
て、わが不屈の頭の折れるまで、御心を知らさずは止まじ
と、大悲の胸をいたしましめたまいし深広の御親心にてまし
ませしか。知れりと思うは知らぬなり、得たと思うは得ぬ
なり、知らさでは止まぬ御誓なり、御身をかけて必ずとど
けんとの御真実なり。かかるやるせなき弥陀の誓願不思議
にたすけられまいらせて往生を遂ぐるの外なきなり。

「若生者のちかいゆえ 信樂まことときいたり」、こ
のやるせない御誓の弓の張りつめた御力にて我等の胸中に
真心徹した一念、実にこれ信樂開発の時刻が到来したの
である。「それおもんみれば信樂の開発することは、如来
選択の願心より発起す」とは、まことにこのやるせない御
親心によって遂に不孝不実のわが身も、初めて大悲の御真
実をいただいた有様である。されば大聖矜哀の善巧という
も、釈尊を初めとして大聖おのおのもろともに、つつまる
ところはこの真実を開闢せんとて善巧の手を下したまう悲

憫れ哀の御実意である。この御真実、御実意をただかなければ、如来の願心を空しくするのである、これでは善巧も何の意味もないことになる。

○釈迦・弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し

われらが無上の信心を、發起せしめたまいけり

○真心徹到するひとは、金剛信なりければ

三品の懺悔するひとと、ひとしと宗師はのたまえり我等は信心發起の一念、真心徹到して、初めて大悲の胸をいためたてまつり、待ちかねたまひし御親心にそむき、反対の方向に遁れ続けていた身の罪惡を懺悔するのほかにないのである。

世の人が、如来を信ずという。如来はかならずよくして下さるといふ。丁度病人が医師を信じて必ずよくして下さると等しい。それも信じたに違いないが、何んとやら、信ずる心に自力をいれているのであるまいか、したがってよくして下さる結果をまちもつける心地はないであろうか。然しながら、もし医師が来て、まづ一診して、直ちに、口を開いて、汝の症状はかくかくならん、汝はかくかくの病に遇いしことあるべし、かくかくの心地するならん、かくかくの傷あらん、苦あらんと、こちらが話さないまえにことごとくこれを知り尽して、先意承問し、そのうえ自分の

無碍光である。難度海中に渡船を得たのである、どうしてその結果をあれこれ云う余裕があるか。無明の闇黒裡にこの無碍光におあいできたのである、どうしてか疑いをさしはさむ余地があるか。敵の陣に火をともしのを見て、火ではなかるうかと思うことがあろうか。世間に云う、所謂疑いながらの往生など云うのは、闇中に火を想像、仮想した者の誤りである。よくよく無明の闇を照らしたまう尽十方無碍光を仰ぎたてまつりなさい。大事なことである、言葉にとどまらぬようにいただかねばならぬ。

悪しきものを見捨てたまわぬが誓願の大悲である、悪しきことをさせてたすけようとの親ではない、親心として一文の金をも盗むものを見をなわして心を傷めて下さるのである。それなのに我々はその親心を傷めたてまつる悪業をするのである、ここに大悲の親心は益々やるせなく、その大悲の御思召しがやみがたく、してはならぬことをなし、犯してならぬことを犯すものに、この切々とした矜哀の親心を知らせて、その罪惡を自覚せしめ、撰取の御手におさめようと待ちかねて下さるのである。

この親心が子に達しない限りは、悲しいことにはまた撰取の光明に入らないのである、たとい親があつても子が知らぬ間は親心は水泡に帰しているのである。我々がこの親

まだ気づかぬ個所までも指摘して、最後に断呼として、いずれの薬も効くものはない、いずれの治療も施すことも出来ぬ、これは死病である、難病である。唯一つ自分はその特效薬を持っている、この薬によりて復活し、再生した実験もある、これを与えるであらうと。

この時になって、これを信ずるのに力をいれるところは無い。信じまいとおもつても信ぜずにはいられない。結果を豫想する余地はない。また結果の如何をかえりみる余地もないであらう。

親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしとき人のおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。たとい法然上人にすかされまいらせて地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずせうろう。いずれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし。南無阿彌陀仏、々々々々々々。

されば、如来はかならずよくして下さると信ずるといふときは、いまだ、このようにとてもよくならないものをよくするとの御誓を聞かないからである。否、その御誓の下に、とてもよくならない我身であることを自覚せないからである。

仏として慈悲ならざるはなく、光明ならざるはなし。阿彌陀仏は難度海を度せんと弘誓である。無明の闇を破る

心をいただかない一刻一刻は親の血涙を流さし、親の肉身を削っている身であると知らねばならぬ。この親の念力があればこそこの放逸懈怠のわが身も眼をさまし、この強剛難化の我身も大悲深重の矢に貫ぬかれるのである。

悪いのは我等の罪業である。「されはそくばくの業をもちける身にありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」故にこの願力にお会いできたからこそ、ますます我々の罪業深重も思い知らされ、親心をいただいたのちにもなおますます我等の罪業の深いことを慚愧するのである。「まことによくよく煩惱の強盛に候にこそ」とは我等がこの世の縁のつきるまで続く慚愧である。

悪をさせてたすけて下さるといふのは真面目の信心から出たことばではない。つまりそれは悪しきものでもお助け下さるといふ横着心の変形にすぎないので、これは警戒せねばならない。親の金をついやし、親を心配させておいて、このように自分に与えて下さる親の恩恵であると、唯金を喜びついやして、その金を作つてあたえられた親心の血涙の結果であることを知らぬ人の言葉である。

その親心をいただいてはじめて、信心が開発されて、その罪惡を慚愧するのである。しかし世の人がその罪惡の者でも助けて下さるといふ横着心を責めることを知っても、罪惡のものでも助けて下さるけれど、なるべく罪惡を犯さ

ぬようにせねばならぬという自力修養におちいることに警戒せねばならぬことを知らない。

横着心というのも、殊勝心というのも、つまりは大慈大悲の深重の親心を知らないためにおこっていることに気付いていないのである。たとえば、富者があって貧者に向つて曰く、我汝の借金を引き受けるから、ちっとも心配するなど。貧者曰く、彼人の親切はまことに有難いことである。決して彼人の親切と金力とを疑うのではないが、しかしわが借金は本当に沢山である、表面にあらわれている借金は、彼人も知つての通りであるが、自分には隠した借金がある。これをすべて明言すれば、彼人はもとより引受けてくれるであろう、それに一点も疑いはないけれど、それではあまりに恩寵に慣れすぎた仕打になるからと、ためらつてばかりいて、その隠した借金だけでも弁済しようとしているとしたらどうであらうか。

こうした時に対処する信仰の心持はどうかというに、もし自分から打ち明けようとしても、とてもそれができるものではない。ところが、もし富者が一歩進めて曰く。我汝の心配しているわけをよく知っている。汝の隠している借金を自分が知らぬと思つているのであるか。それは幼稚な考えである。自分が汝の借金を引き受けようというわけ

無 自 覚 の 身

親鸞聖人は、教行信証に、涅槃経を引かれて、世の中に三種の病氣ある、その病氣の人とは、

一、謗大乘（むごうだいじやう）正しき道をそしる、正しき道に徹底せる人をそしる。

二、五逆罪（ごぎやくざい）父母を殺す、真人を殺す、和合僧を破る、仏身より血を出す。などの罪人。

三、一闍提（いちせくだい）断善根、信不具のもの。

この一闍提（いちせくだい）というのが問題であります。これに続いて阿闍世王の物語があります。この王はどんな人かというに、才二の五逆罪を犯した人である。これについて私共が考えねばならぬことは、五逆罪を犯すほどの人は、ひるがえつてくることもまた鮮かである。悪にも強いが善にも強いのであります。この王は、父を獄死せしめ、母を深宮に押込めた程の逆悪を犯したが、ひるがえる時には非常に鮮かにひるがえつて居るのであります。

その次の一闍提（いちせくだい）というのが涅槃経にもいろいろ説明して

は、特に汝の隠した借金に心配していることも知つてのうえである。汝の心配するのはこれこれであらうと、「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば他力の悲願はかくのごときのおほゆるなり」ここにいたつて、どうして隠しておれようや。我等のこの罪惡の底までも見透してお助け下さるうとの大慈深重の親心に対しては、我等の罪惡深重煩惱熾盛の心の底までとかさされて、「功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水へたてなし」であり、願力無窮にましますば、罪業深重もおもからず、弘智無辺にましますば、散乱放逸もすてられずとは、まことに本願力のやるせなき親心にあいたてまつりて、遂にむなしく過ぐる能わぬ強縁である。南無阿弥陀仏、々々々々々々。
〔「求道」才七巻五号〕



福 島 政 雄

あるが、一口に言えば、何としても手のつけようのない人である。例えば屍のようなものである。如何な名医でも屍は治すことが出来ない。病氣の人は治すことも出来るが、屍は治すことが出来ない。一闍提とは、つまり、求道心の微塵もない、全く無自覚の、何とも手のつけようのない、例えば屍のようなものである。この世の中に種々な菩薩があつて、その菩薩は色々の心の病を治すが、この者ばかりは治すことが出来ない。もろもろの人には仏性があるが、この者は仏性が微塵もない。全く手のつけようのない屍であり、どんな菩薩でも如何ともなし得ない代物である。この才三にあげてある一闍提こそ何よりも一番問題となるのであります。

これは他人の問題でなく、私の問題であります。この阿闍世の物語を見ましても、私は、王はなるほど五逆罪を犯したが、廻心が非常に鮮かであった。が、さて自分はどうか、自分は以上三つの中のどれであるか。そう

言われたくないし、思いたくはないが、結局は自分は一闡提であるということに落着くのである。

こう云いながら、私には自分はまだか屍ではないという心が動く。口では一闡提であると云いながら、本当はその自覚は分らないのであります。

自分では屍でない、五逆罪には落ちて一闡提ではないと言いたいと思っても、結局、当らないと思つて居ることが当つて居るのである。いよいよ死ぬる病人は自分は死ぬると思つて居らない、よくなる病人の方がかえつて死ぬると思つて居ない、よくなる病人の方がかえつて死ぬるのではあるまいかと思う。実際に死ぬる人はよくなることのみ思つて死の自覚はない。人間というものはこういうものである、自分如実の相が分らないのであります。

自分は悪いには悪いが、さすがにあれほどではないというのが、私の根性である。しかし、あれほどではないと思つてはいるが、実は急所に當つて居る。急所に當つて居るのに逃げようとあせる。私共は五逆罪であるかも知れぬが一闡提ではあるまいと、丁度病人が明日はよくなるだろうと思いつつ死んで行くように、自分は一闡提ではないと思ひながら、結局するするとそれに堕ちて行くのであります。自分の本当の相が分らないところからそうなるのであります。結局私は一生無自覚のままに過してゆくといふこ

とが、かけ値のない自分の歩みであり、自分の相である。そこを親鸞聖人は明快に言われてある。親鸞は斯様な自覚に入つて意義ある生活をして居るとは仰せられていない。どこどこまでも自分は無意義の生活を續けて居る。実に恥すべきである、と。そしてこの三種の難治の機をあげて居られる。

自覚ということが自覚にならぬ。一闡提が自分の境地であるということに落着くのである。そういうところに着きたくない自分が、結局そこに落ちてゆくのである。一闡提になりたくない／＼と思ひながらそこに落ちて行くのであります。

親鸞聖人が阿闍世王の物語をお引きになつて居られる中に、このお言葉にふくまれてある御心持が限りなく私に響いてくるのであります。人生の行路を進んで行くうち、人生問題に打突かつては、私は一闡提の自覚もないということを感じてくるのであります。私の心境というものは無限に浅薄なものであることを、次から次へと見せつけられてゆくばかりであります。そこに、私の中に、阿闍世王の物語が巻きかえしまきかえし展開されてくるのであります。

人間が、自分の姿というものに眼がさめる。自分の価値を自覚する。自分の値打がわかるということは非常に重大なことであることを数年来考えて居ります。私は、自分は

とになるのであります。もし自分は無自覚でないと思ふときは、自分をごまかしているので、ある一種の殊勝らしい自分の気持をとらえているに過ぎないのであります。

結局私は苦しみと見えれば苦しみ、悲しみに見えれば悲しむ。大丈夫の心のつもりで居ても、何かの問題ですぐぐらぐらする、こういう頼りない根性が私である。このたよりないぐらぐらとする心の引き続き、その無常なすがたこそ私の自性である。磐石の如く動かない堅い心は私の中には微塵もない。私は徹頭徹尾ぐらぐらの心の上に立つもので、息を引取るまで無自覚から無自覚をたどり行くものであります。そして時々人間煩惱の毒酒に酔うのであります。そんな時には、いよいよ苦しみの底に至つて初めてお念仏の世界に触れるのであると申して、そう思つて居りますが、それはお念仏というものを持ってきて、自分で自分の毒酒を製造しているのであります。

私の人生における如実の歩みはこんなところに慰安があるのではない。何等の修飾のない、何の幻をも描かない人生の歩みというものは、その無自覚な一歩一歩をあゆんでいる、その歩みのうちに、何かに打突かつてはハッと目が醒める気持がする。そして又無自覚に眠る。またハッと気がつく、またこんこんと眠つてゆく。つまり自分の相というものに目が醒めず、眠りから眠りに移つてゆくといふこ

カメレオンのようなものであると思つるのであります。カメレオンという動物は、緑の草原に行けば緑色、樺色のところに行けば樺色に變じ、彼の本来の色はどこにあるか分らない。その居り場、居り場によつて變るのである。私はそれを感ずるのである。それは私自身が、修養とか、兄弟とか家庭とか、色々問題にしている。が、自分は修養ということに破れて初めて絶対の信仰に目覚めさせられたのである。けれども絶対他力の信仰も、近角先生のお話では、是も限りない底のあるもので、落ちて行く、もつと掘ればそこに泉がでる。そこに腰を落ちつける。いやこれはまだ底ではない。又掘る、掘ればそこに清い水が出てくる。破れてまた往く。一つ往けば、又一つ。こうして無限に行くのが信仰の問題であると先生は仰せられました。

これを自分の上に考えて見ると、昨日は今日と嘘から嘘である。まことと思つことが嘘になる。この現実の相を見せつけられ、斯うしてゆくうちには魂が決定して行くのであるまいかと妄想して居つたこともあります。私の西洋での二ヶ年間の生活を投げ出してみれば、すべてこれは妄想であつた。周囲の環境や、居り場、居り場であつて来る。緑の中に居れば緑になる、西洋を今まで緑だと思つて居た、その緑色はちがひ西洋が灰色ならば又灰色になつて居る自分を発見して、自分の魂の現実をすべて裏切られ

る。自分の浮草のような生命が、次から次へと裏切られてゆく。ここに魂が居ると言うことは言われないのである。自分は縁次才でどんな間違いでも為しかねないということがよくわかる。どこまでも頼りないものであることがはっきりする。

しかし、只一つ、どこどこでも頼りない、無自覚の歩み、ふらふらと限りなき歩み続ける根柢のない私のいのちのうえに、一つになって共に歩みを運ばるもの、私の無自覚の途上、私のいのちの中心にとびこんで、私にどこどこまでも涙をそいで、私と共に働いて下さる生きたお力、実際の人生問題にぶっつかれることに、この大いなるまこととのいのちの力というものを感ぜしめられる、忘れ続ける私に、私を目醒めさせようとし、私が苦しめば、私と共に苦しめ給い、迷えば私と共に迷い、常に私に入り来って私のいのちと共に働きたまう力、私の上にさまざまの御縁を通して、活きた力として働き、私を背負って生きて下さる。この大いなる力が私のいのちに入り満ちていて下さることを感じるのであります。

「人生問題と信仰」より抜。

心光のあと

福島 政雄

昭和三十年の歌

述懐

人の世のさがしき道に老の身を　むち打ちて歩む一日ひとひよ

御仏のとはのひかりのなかりせば　さがしき道にたふれ伏さましを

昭和三十三年の歌

一月十九日、母の命日

人の世に恋ふる此の身や　亡き母の無き影追ひて年月を經にし

尽十方無碍の光に入り満ちて此の身を照らす久遠の母よ

一月二十三日　求道読書五十余年

かへりみる五十余年のたましひの迎りのあとに心光照らすも

二月五日、古稀の祝

七十路の齡経ぬれど短をこえずと孔子のたまふ心境は遠し

一 道 會 の 記

昭和五十三年十月二十九日、午後一時から、故池山栄吉先生並びに故人となられた諸先生の一道會が開催され、遠く日本中の各地からこの追憶會に参集された。孫が玄関の履物を数えてきて九十あったという、その外、内玄関から入った人々もあるのが百人以上の参集であった。

長崎からの一団の人々は毎年のことながら、前日から参道の清掃や、会場の掛け物など手伝って下さった。午前中雨降りて心配したが、開会の頃には雨もやみほっとしたことであった。

先ず御仏前に阿弥陀經を拜誦し、終って歎異抄十章までを、池山先生のお写真に向って拜誦する。毎年「幸に有縁の知識に依らずんば、いかでか易行の一門に」の所で涙が出て声が詰るので、今年は前から覚悟しておいて大声を挙げて詰らずに拜誦した。

西元宗助先生は学会があるので欠席との通知があったのが、無理に御都合されて参加して下され有難さで一杯であ

榊 原 徳 草

る。それで、最初に先生のお話を伺うた。大要左の通りであった。

昨年は私、病氣してお参り出来ませんでした。今年は参らせていただき有難く存じて居ります。

改めて池山先生をはじめ諸先生方の御恩徳を憶うこととあります。先ず思いますことは、此所、浄住寺様も娑婆世界であります、然しお念仏申す所、御縁の深い浄住寺様はお浄土への入口だという感じで、その感じが切実なこととあります。

この一年間を振り返って見ますと、向島諦宜先生、今日で亡くなられて丁度一ヶ月目です。九月二十九日に亡くなられました。特に私は兄のように思っておった方でございます。この一道會には、特別のお障りのない限りお参りになりました。又佐々木徹真先生も亡くなられました。そんなことで慈光誌と姉妹關係にありました自照誌が三十年間の歴史を閉じました。そういうことも思いしのばれること

であります。

今から一週間程前、近頃年をとったのか、頭が少しぼんやりしてまいりまして、いつも何でもなく目がさめるのです。どういうわけかナンマンダブツと申して居たんです。そうすると、私の方からでなく、御浄土の方から、仏様の方から、たすけにやおかぬという呼び声がする、有難かったです。多分それは一月二十日が金子大栄先生の三回忌だった、その前の十二月十五日に、高倉会館で加藤弁三郎先生、在家仏教会の会長さんで非常に有難いお方です。その先生が、金子先生の御生涯をしのばれ、御自分の心境をも述べられたんでございましょう「浄土を求めて九十年」というお話があったんです。そんなお話をうけたまわって、金子先生が浄土を求めて九十年であったのか、それとも御浄土から求められて九十年であったのか、仏様から求められて九十年であったのか、そんなことを思ったもんですから、そんな夢を見たんだと思うんです。

私の方からお浄土へ道はついていないんです、お浄土から私へ道はついていない。くどいようですが、道はお浄土の方から私へついている。そんなことで有難いなあと感じたことです。

もう一つ感じますことは、こんなことは申しあげてよいか悪いか解りませんが、皆様方は私と同じように凡夫の顔

をしていられますね、しかし私にとっては皆様方は本当は仏様にましますのです。

大無量寿経に才十七願があります、諸仏称揚の願があります。諸仏称揚の願、私からは、池山先生、諸先生方、皆様方、諸仏にまします。こう言葉で云えばおかしくなりませんが、そういうことになりました。

次に、私、今日は心配していましたが、花田先生の奥様がおけがされたのでお見えにならないのじゃないかと。それについて連想しますと、徳草師も、花田先生も、一期一会、これで終りじゃないかと。一道会は今年限りじゃないかと、そう思うこともあり。御病気の木村無相さんも見えておられます。今ここに来て居られる八木幹人さんから承りますと、木村さんは昨夜八木さん宅に宿られ、夜中に二階から小便されたとのこと、年をとると夜は小便が近い、ありがたいなあと思いました。

終りに、徳草師の御息の直樹さんは、今度禪宗の立派なお坊さんとなられました。私この一年を振り返って見まして、直樹さんが浄住寺の後継者の資格を得られた、こんな喜ばしいことはありません。これで一道会は続けられるわけがあります。

とりとめもないこと申しました、これで失礼いたしました。

自 照 日 誌 抄

(八)

— 元旦 —

西 元 宗 助

元旦は八時すぎ、そっと起床する。大晦日の晩、家内たち、よほど遅くまで起きていたらしく、みんな、まだやすんでいる、しかし私が起きると、隣りの寢床の家妻が起きる。やがて千葉から来ている孫たちも、その親たちも、娘も。

洗面をすませ、日の丸の旗を門にたて、ご仏前に坐して初勤行。三才の孫が背後にきて神妙にすわっている。

やがて家族一同、表座敷に揃って新年のご挨拶。まずおとそをいただき、ついでに家内たち苦心のお重箱のおせち料理に箸をつける。小さな幸せを感じて、そっとお念仏申す。わたしもついに生死の峠を越えて七十路に。

年末から郵便物の遅配で、どうなることかと案じていた賀状がめでたく配達される。一枚一枚、めくっていく。そ

れそれになつかしく嬉しく有難い。賀状について虚礼廃止と云う方もあるが、それはむしろ、その方ご自身がそういう気持でおありなさるか、あるいはあまり無理して賀状を出しすぎているからであると思う。

広島の藤秀翠（しゅうすい）先生の御賀状に、ことしもお歌が三首、添えられてある。あまりにも有難いので、その中の二首を左にご披露させていただく、先生の九十四歳の新春を寿（ことぶき）ながら。

一

一如より我れ来れりと室（の）りたまふみ言（こと）尊し
釈迦牟尼如来

ふと洩（も）るる念仏なれどこれはこれ劫初（こうしよ）以来のみ仏の声

○
 年末、下程勇吉先生（京都大学名誉教授）宅に挨拶に伺う。談たまたま二宮尊徳翁のことに及んで、晩年、尊徳が自分の体得したところのものは、大海の一滴（ひとしずく）の如きにすぎないと、高弟の富田高慶にもらしたというお話を拝聴して、すくなくから感銘する。

○ ○ ○
 大晩日に能登のあるお寺での報恩構法話の筆録が届けられてくる。わたしの講話したものの録音テープを原稿紙に筆写したもので、担当者のご苦勞は大変であつたと思われ。ただし一見して慚愧冷汗。まったくマンネリズムにおちいつている。それにもともと話し言葉と書き言葉とは違うのであるし、そのうえ私の言語の語尾が不明確であるためもあって、いや、それよりも頭が悪いために、いや、それよりも私の思想と信仰が、いかに不徹底であるかを示すもので、まったく頭のあげようがありません。正月、ともかくこれで、一苦勞することになりました。

新春のたより

昭和五十四年 元日

木村無相

○ 病むベッドあおむいて書く年賀状

○ 初夢で賀状沢山いただきし

○ 元日や不思議のいのちいただきて

○ 生きていくことの不思議やお元日

○ 心臓の身をいたわりつ雑煮かな

○ 念仏はいのちなりけりお元日

★ ★ ★ ★ ★

歎異抄——身読記 花田 正夫 著

定価 千八百円・送料二百円

発行所 東京都文京区千駄木二一八一三

振替 東京 〇一三三七二四番

再版のため御案内いたします。 慈光社

念 仏 詩 抄

このころ

和上 禿頭誠師

和上おおせに
 //心にもし形あらば

捕縛（ほばく）して

性根のつくまで

たたかんと

古人の歎かれしも

コトワリなりー〃

このころ

凡夫ごときの

手におえず

弥陀も五兆（ごちょう）の

御苦勞されし

木 村 無 相

ナムアマミダブツ
 ナムアマミダブツ

わが身は

和上おおせに

//わが身は仏法に

なっているかいないかは

わが身にかえりみて

明らかに知らるることー〃

わが身は仏法に

なっているかいないか

わが身は仏法に

なっているかいないか

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

自性

和上おおせに

〃自性のあさましさを
あまり沙汰して
我れこそ自性を
知りたるように思い
おごり顔なるは
いよいよ浅ましき
ことなり——〃

わかつたようで
わからぬ自性
自性がホントに知れたら
ここにこうして平気で
居られることか
自性はいかに
わからぬじまいか—

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

逆謗

和上おおせに

〃長崎のもん女曰く
いよいよ逆謗の屍骸
なりのお助け——〃

ご和讃に
〃名号不思議の信心は
逆謗の屍骸も
とどまらず——〃
逆謗なりでなくば
なんとしよう
逆謗なりでなくて
なんとしよう—

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

大悲

和上おおせに

〃地獄覚悟で聞く気は
なくとも
どうでもこうでも
わが浄土へ生れさせ
ずばと思召す如来の
大悲なれば——〃

今こうして生れ難き
人界に生を受けさせ
お聞かせくださるる
お聞かせは大悲—
大悲をお聞かせ—

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

食着 (とんじやく)

和上おおせに

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

逆謗

和上おおせに

〃長崎のもん女曰く
いよいよ逆謗の屍骸
なりのお助け——〃

ご和讃に
〃名号不思議の信心は
逆謗の屍骸も
とどまらず——〃
逆謗なりでなくば
なんとしよう
逆謗なりでなくて
なんとしよう—

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

〃とかく—

喜ばれぬの
疑い晴れかねるに
食着しし
しみじみ御恩が喜
ばれぬ
その心で百年聞い
ても疑いは晴れる
道理はない——〃

喜ばれぬことより
疑いより
食着が問題か—
食着が止まぬ
どうしても止まぬ
どうしても止めよう
とするのも
また食着か—

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

久遠の友

人生をよく旅にたとえられるが、その旅を楽しく賑やかにするものはよき友の存在であろう。古人も友あり遠方より来るまた快しからずや、とも云い、世の諺にも、旅は道連れ世は情けと云い、遠い道も二人で行けば苦にならぬ。

さてその友にも種々ある。竹馬、同郷、同窓、趣味、職場の友等であるが、理想的なものには、刎頸の交り、断金の交り、無二の友、真実の知己、等々である。然しこれらはみな有限相對の上に結ばれた友情であるから、有偽転変する、したがって不安定である。

久遠の友とは絶対無限の真実を基盤として自然に結ばれる宗教的同朋のことである。ここで久遠とは、唯漠然と永く続くということではない、無常の現実に即して、時間や空間のへだたりに障えられぬものを直感する時に云える言葉である。だから自分自身が、絶対無限の真実心、即ち仏心に帰依する時、はじめて見出せるものである。要は自分が広大無辺な仏心に帰しまつっているか否かにある。

花田正夫

ところが、相對有限の身で、絶対無限者に帰入することは、自分の智慧才覚の及ぶところではない。どんなにもがいても太陽に手がとどかぬように、大きな隔りがある。しかし、絶対無限なる仏心は、相對虚仮の我等を内につつまみおさめていて下さるのである。何時も申し上げるように、親心の子は知らぬが、知らぬからと云って子を捨てる親はない。絶えることのない親の慈愛の情が、点滴が岩をも穿つように、堅く閉じた子供の身にしみ込んでくるのである。聖徳太子は、篤く三宝を敬え、とも、行善の義、もと帰依にありと、仰言りながら、その帰依は、凡夫の力で如来に帰依することは出来ぬが、如来に調伏せられて如来に帰依することが出来ると、信ずる力もない身にこうむる如来善巧の大悲をたたえていられる。

十二月号に掲げさせていただいた近角先生の宗教的同朋は「対人關係において、自分が善をもって勝ち抜くことが出来ず、悪に負けてばかりいる、互いに日夜他人を悪へ落

し合いをしている。どんなに我慢してもとても出来ぬ。それなのにこの私の所作を眺めて憐むべき者と思ひ、たとえ私がそれをうけず、かえって怨み、打たんとすると、何処々々までお見捨てのない大慈悲心にふれて、その深いおまことに感化せられる。仏陀とはこのかたであると気が付いた一刹那に仏の慈悲が全身に浸みわたった。実に同心の最大良友を得た。」と仰言っている。

その後の先生の御生涯は、真実の朋友の如来に手をとられて、幾山河を越えに越えて、有縁の人々に如来の大悲を指ざし続けて下さったのである。

私自身、対人關係において、夜目、遠目、傘の内と云うように、はじめのしばらくは、不完全な人間なのに、相手をよく見ているが、利害が直接關係しはじめ、次から次へと欠点が目立って見えてきた。その時、段々とへだたて心がおこり、相手の無理解を責めはじめた。その反面、このおそろしい心を何とかよくなれぬものと、反省もし努めても見るが、サイの河原の石積みで崩れてしまった。そして出て来たのは鬼心である。それでも自分が悪いとは思えず、相手が無理解だから腹が立つのだと、その責任を向うにきせていた。そうした時、歎異抄十三章に

「さるべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべし」
との聖人のお言葉が私の心を射た。内に煩惱具足の身と

して、縁次第ではどうした業(ごう)さらしをしてかすかも知れぬ身、その原因は内にひそむ煩惱の鬼であり、而も煩惱無尽の身には、洗えば洗うほど汚れる手で、その始末がつかない。そこを歎異抄の三章に

「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」

と、聖人が、わが御身にひきかけられてのおことばによって徹頭徹尾煩惱のかたまりの身、人さまもあきれ、わが身にも愛想のつきる身をお見抜き下さって、さしのべて下さる大悲心ましますと知らされ、生れてはじめて、有難いなあ！と思わず叫んだのである。それまでは、はずかしいことであるが、有難い道理はよく聞かされていたが、有難いなあとはなれなかつたのである。砂糖をなめると甘いと言かされていたのが、実際に砂糖を食べて、おいしいなあ！と知らされたと同様である。

その喜びは感情であるから、時によって消長するが、仏はそのことまでを御承知の上から、お呆れのない、否そういう者をこそ一層あわれんで下さると知らされ、悲喜を越えたたのもしさをおぼえるのである。ここに今一人の私となつていつも御一緒して下さるお方を恵まれたのである。

次に、久遠の友情のもつ特長をあげよう。

一、不減性

世間では、離れるとうとんじ、遠ざかると忘れるのがその鉄則である。ところがこの宗教的同朋の心の通いは、時と所のへだたりに障えられぬものがある。

業報として遠く離れ住んでも、いつも隣りに住むような感情が続く。だからたまに会っても、その時間のへだたりを感じないのである。

時間の上で云えば、聖人の御臨末の書に

わが年きわまりて安養浄土に還帰すといえども、和歌の浦曲(うらわ)のかたを浪の、寄せかけ寄せかけ帰らんと同じ一人居て喜ばば二人と思うべし

二人居て喜ばば三人と思うべし

その一人は親鸞なり。

われなくも法は尽きまじ和歌の浦

あをくさ人のあらんかぎり

とある。これは聖人のお弟子が聖人をお慕い申す心から書かれたもので聖人のものでないといわれるが、そこに時をこえて心の通う妙味があふれている。

元来、真実なるおみのりは、古くならない新しさがあ

○

なるのに反したものである。たとえば千三百年昔の聖徳太子のお言葉が、現に自分の心に、その通りでありますと同心せしめられ、八百年前の聖人のおことばが、生き生きとして心にひびいてくる。ここに古くならない新しさがあ

る。この味いからその不減なことが自明なこととなつられるのである。

更に、久遠の友情は、死によってきまたげられず、いつも生き生きと現存し、持続するのである。数年前、五十年来の友人であった渡辺さんとお別れしたが、最後の病床にあつて「五十年来の友情も無常の嵐に破られて行くが、お念仏につながる友は、死を越えてお浄土までつながる。南無阿弥陀仏」と申すと「ありがたいね、南無阿弥陀仏」と、共に讃仰したことは終生忘れられぬことであつた。

二、自然のまじわり

我々は自分の淋しさから友を求めるが、人と人の交りは時々刻々変化して行くから、自分を満足してくれた友が、何時そうでなくなるかも知れない、すると古下駄のように破棄されてしまう。所謂、利害得失によって離合集散は勝手次第となる。

ところが「仏法は一人居てよろこぶ法なり」とも「信のうえは一人居てよろこぶ」と蓮如上人の御問書にあるように、大勢集つて氣勢をあげ、一人になると消沈してしま

う、所謂群集心理的法喜でなく、一人居て満たされると

きりがないが、京都時代に、法友の一人白井寅男さんが或時「あんたと僕とは、性格も、環境も異なるから、これから意見の相違もあろう、論争もするだろうけれど、そんなこととでさえられぬ心の通いがありますね」とひとりごとのように話してくれたことが、今も耳の底にとどまっている。

同じ親をもつ兄弟姉妹が、時に争うこともあるが、そのしこりは何時か解消してしまふに等しいものを感じるのである。

三、一切がわが師となる

これについて私事を申せば、私が学校を卒してはじめて大連の関東別院に赴任した時、全く未知な人々の間に入りこんだ。そこであまりに淋しいので、友達を作ることに専念していた。ところが、歎異抄の六章に「つくべき縁あればともない、離るべき縁あればはなること云々」の一句に心うたれて、離合は因縁によると云える心境は、仏心に自分の煩惱心が、海綿が水をふくむように、すみずみまで

た時、京都時代からよく知っていたくれた友があつて、大歓迎をうけた。ところが、性格的にもその友と合わぬ人々がいてそのグループは、互に虎視眈々としていた。私ははじめのうち、自分に好意を示してくれる友をよい友とし、

たしなむことこそ一番大切であると知らされた。そうこうしているうちに、隣室にいた増山さんがフトした縁から求道の友と現われて下さり、毎日のように愚問愚答を続けながら二ケ年ほどごし、私は内地に引き上げた。その後、増山さんは名古屋にも移り住んだけれど、今

反対の者を隔て、軽蔑していたが、或事件から、そうでない、自分に反対する人があればこそ、自分の足下をかえりみて、自重も出来た。もしみんなが好意をもっていてくれたら、自分はいふにやまぬものになつてしまふであらう、と気づき双方共に私によき人々であつたと念仏裡にうけとれはじめた。

度の大戦で家族を郷里に疎開さし、終戦と共に自分も国へ帰った。こうして四十年の月日がすぎた今日、地下水が山

や谷にさえられないで交流するように、朋友として変らぬ心のまじわりをさせて貰っている。その外に思い出すと、

りかえり、自分できめた、善悪、好悪、美醜の中にも、私の導かれる一縷の光明をほのかに知らされはじめた。

こうして、自分勝手な心から、善い友、悪い友とへだててならぬ、念仏の歩みにおいては、すべてがよい師と転じて、夫々の人の持つ抄味を教えられることに気づく扉がひらかれたのである。

四、普遍性

宗教的同朋は、如来を中心とした交りだが、その如来は極悪人も極悪人も、さらにいのち且夕にせまる、短命者をもことに悲憫したまうのである。このことは、とかく自我の殻の中に閉じこもって、油が水に浮いたようなひとりの生活になりやすい私を、ひろい天地に出さして下さるのである。

その点を具体的にのべよう。聖人の常の仰せに「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」とある。聖人が、人類のためとか、生きとしいける者のためと仰言らず、御自身の上に具体的に、直感的にいつも告白して下さることを力強くありがたくお聞きしていた。そして、そうしたお味いを持たれた場所として「さればそくばくの業もちける身」と仰言る。しかもその聖人は「さ

撮 取 不 捨

よき人々に導かれて

かねて宮地先生に御示談をお願いしてありましたので二月十八日、今日こそは阿弥陀仏のお慈悲がいただけなければ生きてわが家には帰るまいと決心して行きました。お宅に着くと、今日来るか、明日来るかと待っていたよとの温かいお言葉でしたが、先生の御家では、今日お子様がお出産なされたとの事で、私も玄關に入ったもの、お取込み中の事ですからご遠慮申し、出直して参りますと申し上げますと、一寸子供を見てやって下さいとのことで、赤ちゃんを見ました。小さなお子様でしたので、小さい可愛いお子様ですねと申したことを思い出します。その御子様は今ではカナダで開教使になっていられます。

私はお祝いを云って帰ろうとしますと、先生が「石田さん明日と云うて生命があると断言出来ますか」と申されて私を二階に追いあげるようになさいましたから、今は遠慮も出来ず坐りました。先生は昨晚からの疲れも見せられずよ

るべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべし」とあるからには、内に煩惱具足の身として、業縁次第ではどんな煩惱が飛び出して、業（ごう）さらしをするかも知れないと仰言るのである。

こうしたことをとおして、人間の織りなす一切の業報の中にも聖人は御自身を見出され、又その業苦の一一の上に、たすけんと思召し立たれている本願を仰がれている。そこに、聖人一人のおすくい、そのまま一切人も大悲の光照下にあることが知らされるのである。

くりかえして申すと、私の業苦の中に聖人が同座して下さり、しかも「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」とくり返して仰言る。そこに私が聖人になるのじゃないが、聖人が私になって下さり、大悲の願海に自然に導き入られるのである。そのまんま、私の煩惱の動くところ、離れず寄り添うて下さる大悲ましますので、私一人のための悲願といただき、同時に一切の人々もその慈光下からられる人は一人もないと知らされるのである。一切即一切人、一切人即一人の妙趣の不思議な消息である。

石 田 十 九 三

ろこんですぐ御法を聞かせて下さいました。いろいろと仏様のお慈悲を承った後に、「何も善いことができないから阿弥陀仏が大願を建てられたのですよ」とのこと、ああそうですかとは云いながら、さほど有難いとは思われません。又先生がいわれるに「貴方は如何なる方面から自己を反省しても地獄より行く所が無い方ではないか」と。しかし私には、地獄が恐ろしくもなく、行かねばならぬとも思いませんでした。

先生は「自己を知ることです」と申されました。当時、思い沈んでいた兄の死、そして親戚の人も急死しました。それも昨年のことです。無常を目の前に見ながら、他人事のように思っている自分に驚き、かつ悲しみました。その晩も三時間程お聞きし下さいましたが、何もわからずに終りました。しかし、先日稲津先生に御示談をうけたまわった時は、人間としての先生だけに頼っていたのに、今晩の先生のお教化は、如来様が直々のお言葉のように思われま

した。十二時近くなるので恋々として先生の門を去りました。先生は、そこまでと申され、大宮五条の電停まで見送って下さいました。私が電車に乗っています時、先生が私よりもさきに合掌して下さって居られました。現に如來の権化の方が居られるのに、信じられない、罪深く障りの多い自分に泣かされるばかりでした。

家を出る時に死を決して出た私が、床につくと一眠りに朝まで寝てしまうような浅間しい私です。自分の意志の弱さに呆れ返ります。もうお念仏のお話を聞きたくありませんでした。しかし聞くまいと思う下から、聞かずに居られない私でした。他力の悲願は、この聞く氣を無くした者の上に常にかかりずめと聞けば、親様の有難さが知れるはずなのに、あまりにも疑惑の雲霧におおわれている私だったのです。

二十三日、広済会の御縁が開かれ、榊原徳草先生がお出下さいました。有難いご法話の後にご示談でした。今晚のご示談は非常にきびしい御示談でした。聞法して居る人々は、さぞかし怒って居られたらうと思われました。しかし私のような者はあれほどきびしいお言葉でなくてはお慈悲に氣づくことができないのではなからうか、と思ったものです。そこでこの先生に聞けば氣づかせて貰えるのではなからうかと思ひ、ひそかに頼りにして居りました。

きました。今のお話も聞いております、という具合で、先生も三十分程で打ち切ってしまわれました。榊原先生は私の真剣に聞く心がないと見抜かれたのか、他のご婦人にお話を転ぜられました。

その時でした。その時でした。同信会の先生方お三人に皆聞法して廻り、最後の頼みの綱が断ち切れた思いでフラフラと立ちあがり、御本尊様に礼拝して、家に帰ろうとしましたが、今晚まだ稲津先生に、先日のお礼を申し上げていないので、御礼をと思って先生の近くに坐りました。

先生は他の方に御示談しておいででしたので、何も云わずにお話を聞いていますと、先生は、私をじろりと見てから、相変らずその方にお話をしておられました。二三十分後に、先生から「石田さん、此頃はどうですか」とたずねられましたので、「私は淋しい日が続きます」とお答えすると、「淋しいということは、心が冷たいということですよ」とお教え下さいました。私は同情心もあり、どんな人にも愛をもってやってきたのに、先生の御言葉は、晴天の霹靂でした。そこで次のことを思い出しました。或人に対して誠意を尽しましたが、先方が冷たくするので、私は近づかない方がよいと思ひ二年程前から近づきませんでした。これは、冷たい人だと思ひ近づかなかった私が氷の様な冷酷な人間であると知らされ「私は冷たい人間でござい

二十四日は同信会の例会でしたから、昨晚は榊原先生もお泊りになり、能瀬さんが居すぎに信にめざめられました。稲津先生も会場へおいでになられました。家内はソワソワして夕食がすみやすとすぐに会場へ参りました。すぐまた妻が帰ってきて、早く来なさい、今会場はお念仏のコースの様ですと云って、また出掛けました。

実は、昨晚能瀬君が、この次に同信会で信にめざめるのは誰だろうと云うので、能瀬君だろうと思つと申しますと能瀬君は、石田さん貴方が先だと思つと申しましたので、そうかも知れないと思つていながら自分の心をいつわり、君だろうと云つた自分に嫌氣がさし、お参りする氣になりませんでした。八時すぎに会場にまいりました。

榊原先生が御婦人の方に御示談をして居られたので、隣りに坐つて聞いて居りますと、そのお話がすむと先生は、私に話しかけられましたので、私は救われたような思いがしました。

同信会の三人の先生に多大なご苦労とご同情をいただきましたが、今最後の先生のお話を頂くことになりましたので、全身が耳になって、一言半句も聞きもらしてはならないと緊張して聞きました。平日のお話と何も変らないのと、昨夜の様な強い語氣ではなく優しいお言葉でしたので張り詰めていた私の氣分もゆるみ、そのことすでお聞

ます」と申し上げました。先生は、御仏のお慈悲をおとぎ下さいました、お聞きしているうちに、氷の様な私が、如來様の光明に照らされて、ポトポトと懺悔の水となつて涙が流れました。ああお慈悲だな！と思ひましたが、私は十数日前から自力の念仏は称えまいと頑固に念仏を申さなかつたのです。そこで「先生、お念仏を申さない私でもお助け下さるのですか」とお聞き申すと、「そうです、そういう者を救わんとお願です」との仰せ。私はその一瞬、何も彼も分らなくなって、全身を前に投げ出したことは覚えておりますが、私が気がついた時は、どれだけ時間がすぎたか、さっぱりわかりませんでした。唯、お慈悲の廣大無辺なのに歡喜して泣いているばかりでした。ナムアマミダブツナムアマミダブツ、今晚のお念仏は心の底から押し上げて出て、丁度河川の堤を切つた様にとどなく流れ出てまいりました。何と幸福な私でしょう、私を取りまいて同信会の人々が非常に歓こんで下さいました。

この会場が極楽のように思われました。やがて御本尊様に礼拝し、光顔魏々として威神極りましたまきぬみ仏を拝しました。今までは偶像とばかり思つていたことがあまりに勿体ないことでした。

あとがき

例年のことながら、二月は仏の涅槃会と聖徳太子の御忌の月である。和讃に親鸞聖人は、

娑婆永劫の苦をすてて
浄土無為を期すること
本師釈迦のちからなり
長時に慈恩を望ずべし

和国の教主聖徳皇

広大恩徳謝しがたし

一心に帰命したてまつり

奉讃不退ならしめよ

と、満腔の報恩の情を述べられている。

万物流転の相對虚仮の人生に、永劫不滅の絶対真実の光明を点じて下さった積尊。

更らに我が国に生れられて、その教を身に

つけられた聖徳太子は「篤く三宝を敬え」とねんごろにお勧め下さって、あらゆる人

々の真実のよるべを掲げて頂いた御恩、謝しても謝しつくせぬものがある。

○

「誓願の親心」の近角先生のお言葉は「たすかるべからざる者のすくい」を徴に入り細にわたってお述べ下さいました。

福島先生は「無自覚の身」と、一蘭提こそ我なり、と最下の衆生の上に注がれる不思議の仏徳を讃仰して下さいました。ここまで我身を打ち明けて下さるおかげで、私こそその通りでありますと引入させられるのである。二月三日は御命日でした。

○ 忙しい中を、一道会の記を榊原さんから送っていただきましたが、最初のところをかかげました。

○ 自照日誌抄は、年頭の一日、筆者の念仏裡の消息を拝し、恵まれて生きる尊さを憶うや切であります。

○ 念仏詩抄は残りすくなくなつたと申しますと、再度の入院中にかかわらず三十余辺を書写してとどけられ、これこそ捨身の偈と拝受せずにはいられなかつた。

○ 石田十九三さんは、御子息の大坂転勤で、五年間の名古屋から奈良県北葛城郡香芝町関屋北、七の一二の二一。に転じられ、一月の集いに皆と名残りを惜しみ合つたことです。

◎ ◎ ◎

常照——松村繁雄遺稿集
発行所 山口市仁保中郷一一九 信行寺
定価 七〇〇円、振替 下関二八三一番

〔御案内〕

○ 毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

○ 地下鉄、新端橋終点下車。

○ 教西寺、法話会。昭和区小椋町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後。市バス、御器所通り。又は北山下車。

○ 地下鉄、御器所通り下車。

○ 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く) 尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四四七